

5人の日本の高校生が、海外の高校生に挑戦！

## ディベートの世界大会で 日本代表チームが2勝をもぎ取る！

2016年7月、ドイツのシュツットガルトで「World Schools Debating Championships」が開かれ、日本からは、全国から選抜された5人の高校生が出場した。全員そろっての練習機会が限られる中、個々にトレーニングを積み、結成式から本番までの5か月間で大きく成長。目標の4勝には届かなかったが、優勝経験のあるスコットランドに勝利するなど、大きな手応えが得られた大会となった。

予選突破を目指し、選手を選抜し、トレーニングを積む

「World Schools Debating Championships (WSDC)」(以下、世界大会)は、世界中の高校生が集まって開かれるディベート大会だ。1988年にオーストラリアで初めて開かれ、以降、世界各地を会場にして、毎年開催されている。

日本からは、全国高校英語ディベート連盟が主催する「全国高校生英語ディベート大会」(以下、全国大会。\*)の優勝校が、2006年から毎年出場してきた。過去9回の総合成績は

72戦6勝66敗。09年出場校の長野県伊那北高校チームの2勝がこれまでの最高勝利数であったが、これには初出場国のナイジェリアとの対戦も含まれており、幸運な面もあった。世界大会には英語を母国語とする国が多く出場していること、さらに、全国大会とは異なる方式が採用されていることから、なかなか予選を突破できなかった。

そうした状況を打破しようと、16年7月に行われた世界大会には、全国の高校から出場希望者を募って選考会を開き、5人の選手による代表チーム「Team Japan 2016」を結成して臨んだ。チームマネージャーで、

### 図1 アジア、及び世界大会概要

両大会とも、チームマネージャー、ジャッジ、選手の組み合わせで1チームとして参加。ジャッジは、自チーム以外の試合のジャッジを担当する。3人のジャッジがボート(vote、投票)した数が多いチームの勝利となる。

#### ● Asia World Schools Debating Championships (AWSDC)

会場 タイ・バンコク

期間 2016年7月6～11日

参加国 12か国(南アフリカ、台湾、マレーシア、タイ、中国、日本、バングラデシュ、インドネシア、シンガポール、韓国、スリランカ、インド)、1か国で複数のチームが出場

試合方式 予選6試合+決勝ラウンド(ベスト8以上)

予選6試合すべて即興型

戦績 2勝6ボート

#### ● World Schools Debating Championships (WSDC)

会場 ドイツ・シュツットガルト

期間 2016年7月19～29日

参加国 55か国(アメリカやイギリス、カナダなど、英語を母国語とする国も含まれる)

試合方式 予選8試合+決勝ラウンド(ベスト16チーム+8チーム)

予選8試合のうち、4試合は約1か月前に論題が発表される準備型、残り4試合はその場で論題が出される即興型

戦績 2勝7ボート(対戦相手:ウェールズ、カタール、ルーマニア、スコットランド、台湾、パキスタン、南アフリカ、クウェート)

\* 2017年の世界大会は、インドネシアのバリが会場。

右記のサイトで参加選手を公募中。<http://henda.global/international/>

\* 2006年12月に初めて開かれ、16年度で11回を迎える。詳しくは、全国高校英語ディベート連盟(HEnDA)のウェブサイトをご覧ください。<http://henda.global/>



チームマネージャー  
**池上博**  
いけがみ・ひろし  
全国高校英語デイベート連盟常任理事。長野県松本県立丘高校英語科教諭。



ジャッジ  
**丸橋洋之**  
まるはし・ひろゆき  
埼玉県立浦和北高校英語科教諭。



コーチ  
**大塚智哉**  
おおつか・ともや  
慶應義塾大学4年生。

選手（写真右から）  
栃木県立宇都宮高校3年生  
**馬場琢淳**  
ばば・たくあ

千葉県・私立翔凨中学校・  
高校3年生  
**関天平**  
せき・てんぺい

神奈川県・私立栄光学園  
中学校・高校3年生  
**浅野広太郎**  
あさの・こうたろう

東京都・私立渋谷教育学  
園渋谷中学高校2年生  
**松尾萌黄**  
まつお・もえぎ

東京都・私立渋谷教育学  
園渋谷中学高校2年生  
**須藤亜佑美**  
すどう・あゆみ

全国高校英語デイベート連盟常任理事の池上博先生（長野県松本県立丘高校教諭）は、次のように語る。

「ほかの国は、国内で代表選手を選抜し、大会に向けて練習を重ねて出場しています。一方、日本は、全国大会の優勝校とはいえ、英語を小中学校で初めて学んだ生徒が主体のチームに世界大会への準備を任せきりにしていました。数学オリンピックや物理オリンピックなどでは、日本の高校生は上位の成績を上げてい

るのに、英語の世界大会では予選も突破できていません。そうした状況を変えたいと、今回、選考会を開き、出場者に専任のコーチをつけてトレーニングするなど、できる限りの準備をして臨むことにしました」

今年2月に選考会を開いて5人の代表選手を決め、すぐに保護者への説明と結成式を行って、7月の世界大会に向けての準備に入った。

練習は、全体練習と個人練習の2本立てだ。選手の居住地が異なり、それぞれの学校生活もあることから、全員が集まることのできる日程を確保するのは難しかった。選手一人ひとりにコーチをつけて、個人練習で

各自のデイベート力を上げていき、全体練習では練習試合を中心に、実戦形式で弱点を補強していった。

また、チームとしての実戦経験を積むために、主に大学生対象の2つの国内大会に出場し、さらに、世界大会の直前に行われるアジア大会にも出場することにした。

### 英語力だけでなく、論理力も重視して選考

応募者19人の中から選ばれたのは、栃木県立宇都宮高校3年生の馬場琢淳さん、千葉県・私立翔凨中学校・高校3年生の関天平さん、東京都・私立渋谷教育学園渋谷中学高校2年生の須藤亜佑美さん、同2年生の松尾萌黄さん、神奈川県・私立栄光学園中学校・高校3年生の浅野広太郎さんの5人。いずれも、全国大会の出場経験がある優秀なデイベーターだ。

選考では、英語力はもちろん、デイベートに必要な論理的思考力も重視された。5人のうち4人は海外在住経験のある帰国子女という中、浅野さんは、高校1・2年生の夏休みにアメリカとイギリスでの語学研修（計

6週間）の経験があるのみだったが、論理力が評価されて選出された。

「昨年、世界大会に出場した先輩が、『世界大会はレベルが高く、とてもよい経験だった』と話しているのを聞き、自分も出場したいと思い、応募しました。選考会では周りは帰国子女ばかりで英語力にハンディがあると思っていたので、選手に選ばれてとてもうれしかったです」（浅野さん）

コーチには、自身も高校時代に世界大会に出場した、慶應義塾大学4年生の大塚智哉さんが就任した。世界大会でのデイベート方式の実績が豊富なことから、世界大会で勝ち抜く方法を伝授するとともに、5人の統括を担った。

写真1 全体練習は、その場で論題を与えてデイベートを行う実戦形式。コーチが選手のスピーチを制して、「10秒でチームのスタンスを言ってください」「自分の論に入るまでが長い」などと厳しく指摘。全員が集まる回数に限られるだけに、密度の濃い練習が続いた。

## 課題は、個性豊かな選手が まとまるためのチームワーク

世界大会での目標は4勝。それを達成するためにはいくつもの課題があった。まずは個々のディベート力を上げることだ。スピーチの構成力や表現力、ジャッジに分かりやすい話し方など、大塚コーチや個別コーチの指導の下、選手個々で課題を見いだし、個人練習を積み重ねた。

次に、知識・教養の蓄積だ。論題には、アメリカのオバマ大統領の外交政策、FTA（自由貿易協定）など、普段の高校生活では話題に上らないようなことも取り上げられる。そこ

で5人は、SNS上にグループをつくり、それぞれが気になる時事ニュースや話題をアップし、知識を共有するようにした。

そして、最も大きな課題であったのが、チームワークを築くことだ。全体練習は5回、合宿は2回行われたが、5人全員がそろって練習できたのはわずか2回だけだった。SNSで連絡は取り合っていたが、互いの個性を知り、チームとして機能させるまで持つていくのは厳しかったと、選手は口をそろえる。

「相手の考えを聞きながら、自分も主張しなくてはいけないところが難しかったです。意見が合わない時に、冷静に話を進められるように心がけました」（関さん）

「学校のチームが居心地がよかっただけに、代表チームでは自分からバリエーションを張ってしまい、それを取り除くのに苦労しました」（馬場さん）

大塚コーチは、チームとしての公的な関係を改善するためには私人的な関係の構築が必要だと考え、自身の実家で合宿を開くなどの工夫をした。

「相手を思いやらなければ、単に意見のぶつかり合いになってしまいま

す。5人それぞれの実力を発揮するために、自分の弱点もさらけだし、互いをフォローし合う関係にしなればいけないと考えました」

そうした中、6月末に出場した国内大会で思うような試合ができず、その悔しさが大きな原動力となった。続く、アジア大会の初戦、インドネシア戦では、チーム全員が同じ方向に意識を向けたことで、驚くほどプレパレーション（準備）がうまくいったのだ。会心の勝利を収め、チームの目指すべき完成形が見えてきた。

「お互いに遠慮がなくなつて、正直にディスカッションして、チームとしてうまく協力できるようになりました。プレパレーションはその後の試合のよしあしを決めるので、毎回必死にやりました」（松尾さん）

アジア大会の成績は6戦2勝6ポイントだったが、選手それぞれが手応えを感じ、世界大会に向けた課題を見いだせていた。

「相手のスピーチの根本を理解できていなくて、スピーチがかみ合っていないことが課題でした」（浅野さん）

「個人スコアを見ると、私のスピーチは自己満足のレベルで、ジャッジ

ジャッジとして参加して

### 指導者として、ジャッジの 立場を知ることが大切

埼玉県立浦和北高校 丸橋洋之

アジア大会と世界大会、それぞれ6試合のジャッジを担当しました。ジャッジは3人で、自分が下した判定については、ほかの2人の判定と同じでも違っていても、判定した理由を明確に伝える必要があります。そうした毅然とした態度でいることや、いろいろな国の英語を聞き取ること、内容を理解するために知識や教養が必要なことなど、まだまだ勉強しなければと痛感しました。

日本では、英語ディベートの認知度をこれからも高めていかなければならず、ジャッジの育成も必須です。指導の際には、ジャッジがどのような考えの下に判断を下すのかを知らなければ指導ができません。そういった面でも、今回、世界トップクラスの中でジャッジの経験を積み、世界レベルのディベートを知ることができたのは、大きな収穫となりました。今回の日本チームの活躍を機に、多くの先生が英語ディベートに関心を持っていただければと思います。

写真2 みんなの考えが折り合わず、けんか寸前までいったこともあったという。しかし、「勝ちたい」という思いは同じ。「みんなともしっかりコミュニケーションを取ることを意識しました」と、浅野さんは振り返る。

に言いたいことが伝わっていないことに気づきました」(須藤さん)

「自分はチームの中でもリスニング力と単語力がなく、様々な国のアクセントへの対応に苦労しました。自分がどんな練習をするべきかを考え始めていました」(馬場さん)

## ずっと目指してきた舞台で 英語圏の国から勝利!

そして迎えた世界大会。5人は持てる力をすべて出し、試合に臨んだ。「勝たなければと気負うこともなく、むしろ挑戦者として強い国とどれだけやれるか楽しみで、今まで積み上げてきたものをすべてぶつけました」(馬場さん)

初戦のウェールズ戦は敗れたが、続くカタル戦は初勝利を収めた。

「以前のチームならば、難しい論題に自滅して負けていましたが、カタル戦では、プレパレーションで考えたことが少しずれていても、ディベートが進むにつれて軌道修正できました」(須藤さん)

チームとして最もよく機能していたのは4戦目のスコットランド戦だったと、須藤さんは続ける。

「各自が役割を果たし、言うべきことを伝えたことが、スコットランド戦の勝利につながったのだと思います。英語圏の国から2ポイントを取り、世界大会でも勝てるんだと、チームで喜びにわきました」

丸橋先生もチームの確かな成長を

感じたという。

「選手は自分の強みと弱みを把握して、例えば、効果的なスピーチの方法を聞さんに聞くなど、互いのよいところから学ぼうとする謙虚な姿勢が見られました」

## 将来的には、 日本で世界大会の開催を

大塚コーチは、今回の世界大会での成果を次のように述べた。

「結成当初は議論にもなっていないでしたが、練習を重ねるうちに筋が通るスピーチができるようになりました。もともと英語力のある選手たちでしたから、論が立てられると、考えを確実に英語で表現でき、ジャッジに伝えられるようになりました。普段から『エコノミスト』『タイム』を読むなど、意識が高く、洞察力もあり、物事を考える力が高い選手たちだったからこそ、過去最高の結果を出せたのだと思います」

すべてが終わり、選手は仲間への感謝を口にする。

「後でコーチがいかに自分たちのことを考えてくれていたか、チームメー

トがいかに多くの努力をしてきたかを知り、自分から変わる大切さを改めて感じました。自分はまだまだですが、世界に出て活躍できるように精進しようと思います」(浅野さん)

「本場に最高のチームでした。それぞれに個性的な人たちで、ぶつかり合っていた頃はそれが嫌でしたが、今はこのチームで出られたことに感謝しています」(松尾さん)

世界大会に初めて代表チームで出場するという挑戦は、次への確実な布石となった。今後の展望について、池上先生は次のように語る。

「大会中、他国のジャッジに『日本のチームの英語は分かりやすかった』と言われ、今年の日本は今までは違うことを印象づけられました。その成果を17年大会にもつなげることが目標です。日本が世界大会の開催国になれるような時代がいつか来ればよいなと思っています。そのためには、選手層の底上げ、ジャッジの育成・強化など、様々な課題がありますが、今大会のような出場形式を改善・定着させることで、国内での英語ディベートと世界大会との連結を強化していきたいと思っています」

写真3 チームとして会心のディベートができたとしても勝てるわけではない。試合後は、敗戦の要因を分析し、次の試合へとつなげた。

写真4 世界大会4日目には、出場各国が自国の遊びや食べ物などを紹介する「Cultural Expo」が開かれ、文化交流を楽しんだ。